浦島太郎

昔々、あるところに、浦島太郎という漁師が住んでいました。ある日、浦島太郎がいつものようにつりから帰ってくると、子ども達がかめをつかまえていじめていました。浦島太郎は、



「これこれ、かめがかわいそうじゃないか。放してあげなさい。」
と言いました。しかし、子ども達は、
「ぼく達が捕まえたかめだよ。何をしてもいいじゃないか。」
と言って、いじめるのをやめません。仕方がないので、浦島太郎は海で捕ってきた魚とかめを交換しました。そして、
「もうつかまるんじゃないよ。さあ、海に帰りなさい。」
と、かめを海に放してあげました。

数日後のことです。いつものように浦島太郎が海でつりをしていると、あの時のかめが現れて言いました。



「浦島太郎さん、この間は助けてくれてありがとう。お礼に竜宮城へご案内します。さあ、わたしの背中に乗ってください。」
浦島太郎がかめの背中に乗ると、かめはぐんぐん海の中をもぐっていきました。海の中はさまざまな色をしたきれいな魚がたくさん泳いでいて、どこまでもどこまでも赤いサンゴの林が続いています。今までに見たことのないような光景が、海の中には広がっていました。やがて、海の底に竜宮城が見えてきました。

竜宮城に着いて奥の部屋に通された浦島太郎を出迎えたのは、見たこともないほど美しい乙姫様でした。
「浦島太郎さん、わたしたちの大事なかめを助けてくださり、本当にありがとうございました。お礼に、この竜宮城で、いつまでもゆっくりしていってくださいね。」



すぐに、たくさんのごちそうが運ばれて、たいやひらめの見事な踊りが始まりました。毎日毎日、浦島太郎は、今までに食べたこともないようなおいしいごちそうを食べ、今までに見たこともないようなきれいな物を見て過ごしました。

Copyright The Japan Foundation

そうして、竜宮城の生活も３年が経ったころです。浦島太郎は、だんだん村の生活が恋しくなってきて、乙姫様に言いました。

「乙姫様、わたしが竜宮城に来てから３年もの間、親切にしてくださり本当にありがとうございました。おいしいごちそうもたっぷりいただいて、きれいな物もたくさん見せていただいたので、そろそろ村に戻ろうと思います。」

乙姫様は残念に思いましたが、浦島太郎を見送ることにしました。お別れの時になって、乙姫様は、おみやげの玉手箱を渡してこう言いました。

「浦島太郎さん、この玉手箱には、あなたが竜宮城で過ごした“時”が入っています。決して開けてはいけませんよ。」



浦島太郎は玉手箱を受け取ると、来たときと同じようにかめの背中に乗って地上の世界に向かいました。かめはすいすい泳いで、あっという間に見慣れた海に戻ってきました。

「じゃあ、浦島太郎さん、どうぞお元気で。」

「かめさんも、お元気で。」

浦島太郎は、家族のことを思いながら足早に家に向かいました。しかし、途中で会う人々は見たことのない人ばかりで、村の様子もすっかり変わっています。浦島太郎の家のあった場所は、ただの空き地になっています。不思議に思った浦島太郎は、近くいたおじいさんに聞きました。

「すみませんが、この辺りに住んでいた浦島太郎という人を知っていますか？」

「浦島太郎…？ そういえば、300年も前にそんな青年がいたということだが、ある日海に出たまま帰らなかったということですよ。」

竜宮城に行っていた３年の間に、地上の世界では 300年も時が経ってしまっていたことを知って、浦島太郎はびっくりしてしまいました。しばらくどうしていいかわからずその場所に座り込んでいましたが、ふと、乙姫様の言った言葉を思い出しました。

「この玉手箱には、あなたが竜宮城で過ごした“時”が入っています。」



この箱を開ければ、過ぎてしまった“時”が戻ってくるかもしれないと思った浦島太郎は、玉手箱を開けました。すると、中からもくもくと真っ白な煙が出てきて、浦島太郎はあっという間に、おじいさんになってしまいました。

Copyright The Japan Foundation